
REVERSE OF EVANGELION

XX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REVERSE OF EVANGELION

【コード】

N9080V

【作者名】

XX

【あらすじ】

サイドインパクト。人類補完計画が発動し、地球上の生命は全て固体としての姿を失った。

その中心となった少年・碇シンジは管理者を名乗る青年からある使命を与えられ時を遡る。全てはこの結末を変えるために…。

作者はLAS派及びアンチミサト&ケンスケ&加持のためその傾向が強くなります。上記がダメな人は戻るを推奨します

プロローグ（前書き）

というわけでしょうも懲りなく新連載です。まあこっちはそれ程頻
繁な更新ではありません。

「できますよ」

シンジの独り言に返答したのは穏やかな笑みを浮かべ肩にコウモリをのせた青年だった

「誰ですか、あなたは」

「名乗る程の者でもありません。しいていうなら通りすがりの仮面ライダーってところですかね」

某ピンクバーコードの台詞をいったあと青年は続けた

「僕は世界を統率する管理者の一人です」

「管理者？世界を統率？つまり神様ってことですか？」

「それには少し語弊がありますね。僕らには例外を除いて人間です。まあ少々強力な力を持っていますが」

例外というのは某オンドウル王子のことである

「さえ、用件だけいいいます。碇シンジ君、君にはこれから時を遡りこの世界を救わなければなりません」

青年のいきなりの言葉にシンジは戸惑いを見せる

「ちょっと待つてください。時を遡るなんてそんな…」

「君は世界の全てを見たのでしょうか？それならわかっているはずですよ」

「それは…」

シンジが手に入れた情報の中にはイレギュラーな物もあり時の遡り
方や平行世界パラレルワールドのこともあった

「改めて説明しましょう」

青年はシンジに話し始めた

「世界は無数に存在します。もしも があつたら、 を選

んでいたらと人生の中で直面する選択肢、何を選ぶかで世界は変化します。例えば、もしも使徒に負けていたらとかもしもサードインパクトが起こらなかつたら…と実際にそういう世界は存在します。

ですが世界は永遠ではありません。増え過ぎた世界はやがて引き合い融合し崩壊するのです。それを止めたり制御するのが僕ら管理者の役目なんです」

「で、それが時間を遡るのになんの関係が？」

「本来ならこの世界はサードインパクトが起こらない筈だった世界なんです。ですが起きてしまったものはしょうがない。ですが、この世界は崩壊してはならない世界、そこでこの世界の中心である君にこの世界を救ってもらいたいんです」

「でも、どうやって？僕の情報の中にはフォースインプクトとしかありませんでしたよ？」

「それは僕がやるので大丈夫です。それでは碇シンジ君どうしますか？」

「……………やります。こんな世界二度と見たくないですからね」

「いい返事です。それでは始めましょう。キバット！タツロット！」

「よっしゃ！キバット」

「いきますよ〜！」

キバットは青年の手に噛みついた

「ガブツ！」

青年に魔皇力という力が注入され、青年の顔にはステンドグラスのような文様が現れ、腰には真紅のベルトが現れる

「変身！」

キバットを腰のベルトにつけ、タツロットは左手に取り付く

すると青年の姿は変わっていく。金色と赤を基調としたボディにコムリとジャック・オ・ランタンをモチーフにしたマスクの戦士、仮面ライダーキバエンペラーフォームだ

「なっ！」

「この位で驚かれたら困りますね」

キバEFは黒と金のフェッスルをキバットに吹かせる

「ファイナルウェイクアップ！」

そのキバットの声と共にキバEFの姿が変わる。右腕はバツシャー、左腕はガルル、ボディはドッガのドガバキエンペラーフォームになるとさらに胴体と腕が金色の部分を除き漆黒となったラストエンペラーフォームになる

「これでいきますよ」

キバL E Fはザンバットソードのフェッスルをキバットに吹かせる
「ウェイクアップ！」

ザンバットソードの刀身に魔皇力がチャージされ…

「はっ！！」

それを振り下ろす。すると空間に裂け目が出る

「この穴からいけます。それと忠告しておきますがあなたは少なからず使徒の力を入れました。その使い所を誤らぬように」

「ありがとうございます」

シンジは空間の裂け目に入ってしまった

「これで、何とかなる」

キバL E Fはオーロラの向こうに消えた

続く…

プロローグ（後書き）

仮面ライダー要素はここだけです。次回からは本格的にエヴァのス
トーリーでいきます。

第巻話 「使徒、再来」

『本日12時30分。東海地方を中心とした関東、中部全域に特別非常事態宣言が発令されました。住民の方々は速やかに指定のシエルトターへ避難してください。繰り返しお伝えします』

「はあ… やっぱりダメだな」

公衆電話の受話器を置いて呟いたのは碇シンジ。そう、管理者の力で逆行した存在だ

「にしても、ミサトさんも何考えてんだか。見失うというよりも遅刻してんじゃないか？」

若干口が悪いのは気にしないで欲しい

「っと、巡航ミサイル、ということは…」

シンジが見た先には黒い人形の体に胸にトリののような顔と赤い球体のある生物

「サキエル…」

〃〃〃

NERV本部

「正体不明の移動物体は、以前本所に対し進行中」

「目標を映像で確認。主モニターに回します」

サキエルの姿が発令所の主モニターに映された

「…15年ぶりだね」

「ああ、間違いない。使徒だ」

その映像を見て意味深な会話したのは冬月コウゾウと碇ゲンドウだ

〃〃〃

再び外

「あんのピア樽女、寝坊ってどういうことだ。たつく、しょうがねえ、場所は分かっているし行ってやるか」

ホンダ・DN-01に乗った少年は愚痴をこぼしたて方向転換すると、アクセルをめいっぱいに吹かした

「にしても、あの人も可哀想だよな…」

シンジは次々と撃墜されていくVTO-L重戦闘機を見て、そうこぼした

「あんな攻撃通用しないのにさ、くだらない見栄で命を散らすことになるんだから…。にしても遅いな」

シンジがそうこぼした所でいきなりホンダ・DN-01がシンジの目の前に止まる

「碇シンジ君だな？乗れよ」

「えっと、あなたは？」

「門河コウガだ。よろしく。ほら、とっとと乗れ。この後に何が起ころかはわかってんだろ？逆行者さん」

コウガはヘルメットのバイザーを上げると、意味深な笑みでシンジにいった

「なんで、そのことを…」

「あの馬鹿兄貴に教えてもらったんだ。詳しくは走りながら話す」

コウガはシンジを後ろにのせる

「ちゃんと捕まってるよ」

そついうとコウガは一気に加速させた

「うわあああああ！？」

~~~~~

サキエルに対し行なわれる攻撃。だが、サキエルはどこ吹く風、悠々と侵攻していく

「目標は依然健在。現在も第3新東京市に向かい進行中」

「出し惜しみはなしだ！何としても目標を潰せ！！」

オペレーターの一人青葉シゲルの報告を聞いた国連軍の高官は語気を荒げる

サキエルはというと向かってきたミサイルを片手で受け止め、そのまま粉碎してしまう

「何故だ！？直撃の筈だ！！」

「戦車大隊は壊滅。誘導兵器も砲爆撃も効果無しか」

「ダメだ！この程度の火力ではラチがあかん！」

国連軍の高官達の語気には焦りが見え隠れしていた

「やはりA・t・フィールドだな」

「ああ、使途に対し通常兵器は役に立たんよ」

コウゾウとゲンドウは何やら意味深な会話をしている。そんな状況の中で守備回線の電話が鳴る

「分かりました。予定通りに発動いたします」

国連軍の高官は何かを命令されたようだった

一方のコウガとシンジの二人はというと

「あ、戦闘機が離れていつてる」

「N2を使う気か。学習能力がないといつかなんというか」

かなり呑気な会話をしていた。ただし速度メーターは振り切っている

「とりあえず、この速度なら直撃する心配はない。えーっと、電話電話っと。あつたあつた、こちら門河、サードチルドレンを確保。

ホンダ・DN-01にて輸送中。つてなわけでカートレインとかバイクトレイン？の用意をよろしく。無論、直通だ。あ？あのピア樽女なら未だに部屋でグッスリだ。すこしは責任持てつての。それじゃ、よろしく」

「ミサトさんは寝坊ですか？」

「ああ。携帯を20回程鳴らしても出なかつたからな。よくまああれで作戦部長が務まるよ」

「それには同意します」

「おっ、見えてきた」

地下に向かうハッチが見えたときに爆風が吹き荒れた

すこし時間を巻き戻すとしてよう

コウガ達が呑気に会話をしているころ、サキエルは御殿場の辺りにさしかかっていた。そこにはN2地雷という国連軍の切り札が仕掛けてあり、サキエルがそこを踏んだ瞬間に爆発した

「やった!！」

「残念ながら、君達の出番はなかったようだな」

発令所でその様子を見ていた国連軍の高官達はどうだという表情でゲンドウとコウゾウの方を向いた

「センサー回復します」

「あの爆発だ。ケリはついている」

青葉の報告に高官達は楽観的な発言をしたが、次の報告でその表情は絶望に変わる

「爆心地にエネルギー反応」

「映像、回復します」

主モニターに映されたのはサキエルの姿だった

「我々の切り札が…」

「なんてことだ」

「化け物めっ!！」

国連軍の高官達は力なく椅子に座る。その後すぐに守備回線の電話が鳴る

「はい、はい、了解しました。碇君、今から本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを見せてもらおう」

「了解です」

「碇君、我々の所有兵器では目標に有効な手段が無いことは認めよう」

「だが、君なら勝てるのかね」

「ご心配ありません。そのためのNERVです」

ゲンドウは眼鏡を上げ、答えた

「期待しておるよ」  
国連軍の高官達は発令所から出ていった  
「目標はいまだ変化無し」  
「現在、迎撃システム稼働率7.5%」  
女性オペレーターと日向マコトが報告する  
「国連軍もお手上げか。どうするつもりだ？」  
「初号機を起動させる」  
「初号機をか？パイロットがないぞ」  
「問題ない。もう一人の予備が届く」  
「実の息子を予備扱いか」

~~~~~

「ふう、なんとか無事だな。これ結構高いからな。よかつたよかつた」
「そつちなんですか？心配するのは」
呑気にバイクの心配をするコウガとそれにツツコミを入れるシンジ。リラックスし過ぎである
「さてと、それじゃあ改めて自己紹介といきますか。俺の名は門河コウガ。14歳、エヴァンゲリオン3号機パイロット兼全機予備パイロットだ。よろしく」
「14歳でバイクに乗っていいんですか？しかも3号機って」
「お前の知ってる時空とは微妙なズレがあるからな。管理者も必死なんだよ」
「あれ？管理者のことを知ってるんですか？」
「一応な。管理者に門河テルって奴がいるんだが、俺はそいつの弟だ」
「成る程。それなら納得」
「で、お前は？」
「碓シンジです」

「あつ、それだけか。おつ、見えてきたぜ」
トンネルから抜けるとそこにはジオフロントの姿が
「さあ、始まるぜ。喜劇が」
コウガはテル譲りであろう黒い笑みを浮かべた

くくく

「こつちだぜ」

「あら、コウガ君」

「ども」

コウガがシンジを格納庫に案内しているときに、金髪の女性赤木リツ
コと出会った

「この子が例の子？」

「そつ、サードチルドレン」

「初めまして、技術部長、E計画責任者赤木リツコよ。よろしく」
「碇シンジです。よろしくお願いします」

こんな感じで問題なく自己紹介を済ませる

「で、ミサトはどうしたの？」

「あのピア樽女は寝坊だ。今でも寝てるんじゃないか？」

コウガの一言は真実だったりする

「あきれた。こんな非常時に」

リツコはあきれてものも言えないようだ

一方発令所

「では冬月後を頼む」

「3年ぶりの対面か…」

「副司令、目標が再び移動を開始しました」

「よし、総員第1種戦闘配置」

再び場所を戻してコウガ達

「あれ？節電でもしてるんですか？真っ暗ですよ」

「今電気をつけるわ」

リッコが格納庫の電気をつける。そこには紫色の巨人の姿が

「これは……斬新なモアイ!!」

「違うわよ!!これは人の造り出した究極の汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオンよ。これはその初号機よ!!」

誇らしげに説明するリッコ。その米神には血管が浮いていたが

「これも父の仕事ですか?」

「そうだ!」

シンジの問いかけに答えたのは格納庫の直上にある強化ガラスの奥にいるゲンドウだ。その姿を見た瞬間、コウガが強化ガラスを割りゲンドウをクウガばりにマウントポジションで殴っていたが…

「このクソ髭眼鏡!シンジに会ったらちゃんと頭を下げて謝る約束だっただろうが!!あの時間ないっていったよなあ?有言実行してくれねえか?総司令さんよお」

「グフツ、ゴブツ、ガハツ。……しゅ…出撃」

「謝ってからだろうがああああ!!」

「ぐほおっ」

襟元を掴み立たせるとそのまま一本背負い投げに移行したコウガ。

ゲンドウはしばらく再起不能……かと思いきや30秒で回復していた

「おまつ、本当に人間か!?!」

「ふっ、問題ない。出撃」

「だとよ、シンジ」

「了解。それじゃあ、操縦方法を教えてください、リッコさん」

「え…ええ。分かったわ。こっちにきて」

シンジはすぐにゲンドウの命令を了承し、リッコはシンジに操縦方法を教えるべくシンジを連れて行った

ちなみに某作戦部長はというと、まだ情眼を貪っていた

~~~~~

発令所

「というわけで作戦部長不在のため、指揮は俺が取る。異論は無いな」

「……いえまったく!!!」

やはり兄弟だろう。テルと同じような口調で完全に異論を封じ込めた

「初号機軌道シークエンス開始!」

「停止信号プラグ排出終了」

オペレーターの伊吹マヤがそれに対応する

「了解。エントリープラグ挿入」

「エントリープラグ注水」

上がってくるのは黄色い液体だ

「これがL・C・Lですか?」

「そうよ。肺がL・C・Lに満たされれば直接酸素を取り込んでくれるわ」

「血の味がします」

「慣れる」

シンジの感想をばっさり切り捨てるコウガであった

「主電源接続」

「全回路、動力伝達、問題無し」

「了解」

「二次コンタクトに入ります」

次々と軌道シークエンスが消化されていく

「A10神経接続、異常なし」

「思考形態は日本語を基本原則としてフィックス。初期コンタクト全て問題なし」

「双方向回線開きます。シンク口率……えっ!??」

「どうしたのマヤ、続けて」

「すいません。シンク口率100%ハーモニクス正常値、暴走ありません」

「凄いわね」

リッコはその数値に驚きを隠せない

「さーてと、シンジ、問題ないな」

「はい」

「作戦は一つ。被害0で敵を殲滅しろ。いいな」

「了解」

結構無謀な作戦なんだけどなあ

「発進準備！」

「了解！」

初号機の発進準備が完了する

「進路クリア、オールグリーン」

「発進準備完了」

「よし。おい髭、いいな」

コウガは振り向き、ゲンドウに訊く

「もちろんだ。使途を倒さない限り、我々に未来は無い」

「碇、本当にこれでいいんだな」

コウガはゲンドウの返事を聞くと正面に向き直す

「発進！！！」

今、シンジの戦いが幕を開ける

続く

## 第貳話 「逆行者と管理者」

コウガの号令の下に発進したエヴァンゲリオン初号機。その姿は第3新東京市郊外にいるサキエルから500m程離れたところに射出された

「最終安全装置解除。エヴァンゲリオン初号機リフトオフ!!」

初号機を固定していた留め具が外され、初号機は使徒を倒せる状態になる

「それじゃあシンジ、作戦はさっき言った通りだ」

「はいはい、分かったよコウガ」

シンジはコウガに軽く返すと一気に走り出し、間合いをつめる

「動いたぞ!!」

「凄いわね」

発令所はちよつとした興奮状態にあった

「はあああああ!!」

初号機はサキエルにパンチするが

キイイイイイイン!!

オレンジ色の八角形の壁に遮られてしまう

「A・Tフィールド!!これでは使徒に接触できない!!」

リツコはそう叫ぶが……

「こんなもの!!」

初号機もA・Tフィールドを展開する

「初号機もA・Tフィールドを展開。位相空間を中和していきます」

「いや、浸食してるな」

マヤの報告に対し意味深な笑みで返すコウガ。もはや勝利は見えていた

「はあっ!!」

A・Tフィールドを中和すると、初号機はアップパー、ストレート、回し蹴りをサキエルに喰らわす

「はあああああ！！」

そのまま手刀をコアに叩き込んだ。サキエルは相打ちを狙ったのか、初号機に取り付いて自爆するが、初号機は無傷だった

「……」

一方的な戦闘に発令所のみなさんは一部を除いて啞然呆然である

「何だあの力は。碇、委員会が煩いぞ」

「問題ない」

「おい髭眼鏡」

「問題ない」

「だそうだみんな。事後処理が終わったら司令のおごりで飲み会だそうだから、急いで片付けろー」

「……おおおおおおお！……」

この時点で発令所の職員は全員やる気を見せた

「さて！私はそんなこと許可した覚えは……」

「おい髭眼鏡」

「問題ない」

「人の話は最後まで聞きましょう」

コウガはテープレコーダーに録音していたようでゲンドウは白旗を上げた

『あのー、僕はどっから戻れば……』

「ごめんなさい。さっきの所に戻ってもらえばいいわ」  
シンジの通信にリッコが返した

15年ぶりの使徒はあつけない最後を迎えた

~~~~~

某所

この暗い空間にいるのは人類補完委員会という国連の組織のメンバーだった

「第3使徒の襲来、随分と唐突だったな」

「災害は忘れたころにやってくるとはよく言ったものだ」
「それにしてもあの初号機の力、我々の予想以上だったよ」
「だが問題はあのパイロットだ。初のシンクログで100%とは少々行き過ぎていないかね」
「聞けばサードは君の息子だそうだが」
「問題はないのだろうか」
「しかも、今回の指揮を取ったのはフォースだというが」
「それについてはどうなのかね？」
「それに君の仕事はこれだけではあるまい」
「…人類補完計画。これこそが君の急務だ」
「左様。その計画こそが、この絶望的状况下における唯一の希望なのだ。我々のね」
「いずれにせよ、使徒再来における計画スケジュールの遅延は認められん。予算については一考しよう」
「では、あとは委員会の仕事だ」
「碓君、ご苦労だったな」
この一言でメンバーのほとんどが退場する
「碓、後戻りは出来んぞ」
最後に残った議長のキール・ローレンツはゲンドウにそういったあとに退場した
「分かっている。我々には時間がないのだ」
そう呟いてからゲンドウも退場した
にしても一方的な会話だったな…

~~~~~

NERV本部 第7ケイジ

「お疲れ、シンジ」

「コウガ…ここにいていいの？」

「大丈夫だ。自分の仕事は終わらせたし、重要な書類はピア樽女の

執務室にほおりこんできたしな」

「それ、大丈夫なの？」

「冗談だ。ほおりこんだのはコピーだ。本物は全部片付けたよ」  
年相応の笑みを浮かべながら軽くいうコウガだった

「そうそう、検査があるからってリツコさんが呼んでたぜ」

「分かった」

コウガは思い出したようにシンジに伝え、シンジは前史で場所を把握しているので走っていった

「さーとと、ユイさんのサルページをどうするかなあ」

コウガはそうぼやきつつ初号機を見つめた

「ま、とりあえず式号機とあいつがこないとな」

コウガはそういってケイジを後にした

~~~~~

司令室

薄暗く無駄に広い司令室、ここにいるのは椅子に座り机の上で手を組んだゲンドウポーズをしているゲンドウとその横で立っているコウゾウ、二人の前には検査を終えたシンジとコウガがいた

「と言うわけだ。副司令を名目上の保護者にして俺の住んでる家でシンジを暮らさせたいんだが」

「ふむ…私は問題ないよコウガ君。部屋はあるのかね？」

「ははっ！独り暮らしには部屋が大過ぎますよ！」

ちなみにコウガの住居は5LDK二階立ての一軒家だったりする

「まったく、馬鹿兄貴はここまで見越していたのか？」

コウガはそう愚痴った

「で髭眼鏡、問題ないな？あの家事無能者のところに送りつけようとするならただじゃおかねえぞ？」

「も…問題ない。好きにしろ…いえ、してください」

「サンキュー。でもってシンジの待遇だが、階級は二尉、契約金は

1億円、各種手当で、生活への不干渉、MAGIへのアクセス権リツコさんクラスの。とりあえずこんなもんか？あと、シンジの精神的傷害等の慰謝料として1億な」

「コウガ、なにもそこまでしなくても……」

「ここでようやく蚊帳の外だったシンジが口を挟んだ」

「いや、本来ならこの位じゃもの足りないんだがな」

「これ以上何を付け加えるき（じゃ）！？」「」

シンジとコウゾウが見事なユニゾンでツツコミを入れた

「さあ、何でしょう？答えはCMの後！なーんてね」

かなりおちゃらけているコウガであった

「まっそう言う訳だから。後はヨロシク！シンジ帰るぞ」

「ちよっコウガ！じゃあ、司令、副司令、失礼しました」

シンジの手を強引に引っ張って司令室を何も言わずに退出するコウガであった

「さてと、帰るか」

「またあの運転か……」

「何言っただ。あれは非常時だったからだ。本来は安全運転の人間だからな」

そんな会話をしつつ、駐車場に向かうコウガ達だった

~~~~~

「お前ら何やってんだ？」

駐車場についたコウガの開口一番である。そこにいたのは諜報部の人間と紫がかった黒髪に赤い制服のジャケットを羽織った美女、葛城ミサトである

「何ってシンジ君を引き取りにきたのよ」

「はあ？おいゴラ、どの面下げてそんなことがいえるんだ？ええっ？遅刻・早退・無断欠勤のオンパレードで部屋の中はゴミ溜め場状態。あげくの果てには生物兵器を作るピア樽女が！！しかも飲んで

「ただろ？酒臭いぞ？」

「何よ！私は作戦部長よ！偉いのよ！何をしても許されるのよ！！」

「それは強権を振りかざすからだろっが！！第一、作戦部長ならちゃんと発令所にいやがれ！！それにシンジの迎えはどうした！？」

「起きれなかつたんだからしょうがないでしょうが！」

「お前何歳のつもりだ！このビア樽三十路女！！……………謀報

部、作戦部長殿を執務室にお連れしろ。門河三佐の命令だ」

「……はっ！！」「」

「ちよつと！離しなさいよ！！私は作戦部長よ！一尉なのよ！偉いのよ！！」

「門河三佐の命令です。上官命令には従ってください」

「作戦部長なら書類整理くらいしろ！それと使徒はもう殲滅しなからな！！！！」

「何勝手に殲滅してんのよ！使徒は私の華麗な指揮がないと倒せないのよ！！」

「耳障りだ！連れてけ！！」

「……はっ！！」「」

ミサトは謀報部に連れられていった

「シンジ、状況が変わった。もう一回司令室にいくぞ」

「う……うん」

コウガは何やら阿修羅か霸王かそんなオーラを放ちつつ司令室に向かった。シンジはその後をついていくことしか出来なかったという

~~~~~

「さーて、今日はパーっといきますか！！」

あれから数十秒でシンジの待遇を変更させたコウガは今現在スーパーで食材を買っている。無論レトルトではない

「料理なら僕が作るよコウガ」

「あ、悪いな。俺あんま料理得意じゃねえんだよ……。サヨには」

コウガが手伝うと料理が原型とどめない」って言われるし……」
「それ、相当だと思うよ」

そんな会話をしつつコウガは食材をカゴに入れていくのだった

「コウガ、そのキュウリサイボが尖ってない」

「はい……」

主夫根性を発揮するシンジであった

~~~~~

コウガ宅

何やら家の回りをうろついていた不審者（尋問したらチルドレンを監視していたと答えた）を軽い食前運動で倒したコウガは家の中と即刻ゲンドウに連絡をいれていた

「てめっ、生活の不干渉を条件に入れてただろうが！！言っとくけど言質はとってるんだからな！最悪軍事裁判でも起こしてやるうか！？」

『私はそんな命令はしていない』

「嘘付け！黒服にサングラスだとどう考えても諜報部だろうが！！」  
『分かった。確認しておく。確認が出来次第報告するから許してくれ』

「……………次は無いぞ？」

『はっ！了解です！！』

特務機関の司令を完全に手駒に収めているコウガであった

「さてと悪いなシンジ」

「いや別に。はいご飯出来たよ」

シンジが持ってきたのはカレー。短時間で出来る料理である

「サンキュ。それじゃあいったきまーす！」

「いただきます」

二人は料理を食べ始めた

「で、この後はどうする？大丈夫はここには目も耳もな……………」

……いやあるな」

何かを察したのかコウガはテレビの裏を見る。すると

「やっぱりな」

案の定盗聴器があった

「この調子だと他にもあるな」

そういつてコウガは懐から暗視ゴーグルを取り出し、付属しているメモリを挿入する

「デンデン」

暗視ゴーグルはデンデン虫に変形し、赤外線センサーを発し始める

「これでよし。しばらくすれば見つけてくれんだろ」

「あれは？」

「メモリガジェットで言つて、馬鹿兄貴が使っただろうっていつてさ。パラレルワールドの情報もあるんだろ？」

「ああ、仮面ライダーの世界の産物か」

「そういうこと」

そんな感じで小一時間程で全ての盗聴器及び隠しカメラを見つけた。たつく、後でプライバシーの侵害つてことで請求しておくか。実際そういう条件だし」

「コウガつていつたい……」

「今の所は管理者の弟つて所か？まあ兄貴に比べたら俺はまだまだだよ。兄貴なんて裏社会のボスですら一睨みで黙らせるんだから」

「どんな人なんだよ……」

「さてと、兄貴の話はあんまりしたくないから……」

「誰の話をしたくないつて？」

「はあ？決まつてんだろ兄貴のだ……つてどわあああああああああ  
！！」

「ようコウガ、思った以上に元気そうだな」

「馬鹿兄貴！なんでここにいるんだ！？」

「いいだろうが、弟よ」

「よかねえよ！！」

「あのーあなたは？」

「おつと自己紹介が遅れたな。弟が世話になつてるな、俺は門河テル。管理者の一人だ」

「あなたが……。でもいったい何の用ですか」

「厳しいねえ。まあいいや。グッドニユースを持ってきたぞ」

「グッドニユース？」

シンジとコウガの声が重なる

「剣崎の野郎がもう一人逆行者を連れてきたみたいだな。誰かは知らないけど、お前のよく知ってる人物だそうだ」

「それだけか？」

「ああ。それだけ」

「なら帰れ」

「ゆっくりしてけじゃないんだな」

「当たり前だ！帰れ馬鹿兄貴！！」

「そうかよ！愚弟！！」

テルはどこからともなく時空の裂け目を作り、その中に入った

「ったく、あれは本当に人間なのか？」

「さあ？」

テルの能力に疑問を持つ二人であった

続く…

~~~~~

おまけ

ドイツ第3支部

「本当に戻つて来れた……」

「嘘は言わない。後はお前次第だからな」

「分かつてるわよ。待ってなさいよシンジー！！」

赤みがかつた金髪に蒼眼の少女と、黒いスーツに身を包んだ長身の
男の会話であった

第参話 「逆行者、転入」

さて、第3使徒がシンジの手により殲滅された翌日。シンジは第3新東京市立第1中学校に転校することになった。ちなみにシンジはこのことをコウガから伝えられている

「じゃ、俺は教室いくから」

「分かった。じゃあまた後で」

コウガはホンダ・DN-01で登校し、シンジを職員室に案内した後教室へ向かった。クラスは案の定2-Aである

「ねえコウガ君、一緒にきた男子って誰？もしかして転校生？」

「んー、俺からは何も言えないな」

「そんなこと言わずに教えてよ」

「断る！」

何気に女子からの好感度が高いコウガである。早速シンジについて聞かれていたが、軽くあしらっている

「さてと……寝るか」

朝から寝出すコウガである。まあ、中学校の勉強は兄によって叩き込まれたらしいが…

「コウガ君！」

「ドワっ！？委員長か、びっくりさせんなよ」

そんなコウガを怒鳴ったのはお下げ髪にそばかすが印象的な少女洞木ヒカリ。このクラスの学級委員長だ

「まったくもう。朝から寝ようとするなんて…」

「昨日徹夜だったんだよ。という訳でお休み」

「ちよつと！！！」

かなりマイペースなコウガである

ガラガラ

そんな音とともにこのクラスの担任である根府川先生が入ってくる
「起立！」

ヒカリの号令で朝の挨拶。なのだが既にコウガは寝ているため何もしていない

「はい。おはようございます。今日は転校生を紹介します。入ってきなさい」

先生に呼ばれて入ってきたのは黒髪に漆黒の瞳、そして中性的な顔立ちの少年。言わずと知れた碓シンジである。ちなみにシンジはというと…

(あ、トウジがいる。よかった、妹さんは無事だったんだ)

まあ前史では大けがを負わせてしまったのでかなりホツとしているようだ

「それでは自己紹介を」

「第2から来ました、碓シンジです。趣味はチェロと料理です。宜しくお願いします」

天使の微笑み(別名女殺しの微笑み)を浮かべながら自己紹介をするシンジ。すでにクラスの女子のほとんどがノックアウトされている「それでは碓君の席は門河君の隣ですね。門河君？」

「ん…?ああ」

先生の呼びかけでようやく目を覚ますコウガであった

「それでは一時間目は自習にしますので碓君との交流にあててください」

そういうと根府川先生は教室を出て行った

「コウガ、何やってんの？」

「見ての通り昼寝だ」

「いや、まだ朝だからね？」

「だが気にするな!」

「」「気にするわ!!」「」「」

「うおっ!?!」

シンジとコウガの掛け合いにクラス全員が入り込むことになったわけ。流石のコウガもびっくりである

「転校生、ちょっとツラかしてくれや」

いきなり話しかけてきたのは黒ジャージに短髪の少年鈴原トウジ

「えーっと、君は？」

「わいは鈴原トウジや。いいからこんかい」

「う…うん」

シンジはトウジに連れて行かれた。コウガが何となく後ろを見るとくせ毛のある茶髪に眼鏡をかけた少年相田ケンスケが怪しい笑みを浮かべていた

「（多分、トウジを焚き付けたのはあの変態だな。……なにがあるか分かんねえし、ついていくか）悪い、ちよつとトイレ」

シンジとの関係について何やら女子から尋問を受けていたコウガはそう言つと教室を出て、気づかれないようにトウジとシンジの後を追った

~~~~~

屋上

「ほんま感謝しとるわー!!」

屋上に出たとたんにいきなり頭を下げるトウジ。シンジはとまどう「ちよつ、いつたいなんのこと？」

「おはんがあロボットのパイロットなんやろ？ワイの妹が逃げ遅れてて…この町に入る前に倒してくれたから無傷ですんだんや」

「そんな……僕は何にもしてないよ」

「いいや、おはんには借りがある。何でも言ってくれや」

「なら、友達になつてくれる？ここに来たばっかでコウガ以外友達はいないんだ」

「そんなら簡単や。ワイのことはトウジでいいで」

「じゃあ、僕もシンジでいいよ。よろしく、トウジ」

「ああ、よろしゅうなシンジ」

前回は少しだけわかだまりのあった二人に本当の友情が芽生えた瞬間だった

「さーて、青春してるとこ悪いんだが、トウジ何でシンジがパイロットだつてことを知っている？」

いきなり音を立てずに現れたコウガに二人はびっくりする

「な……」

「いつの間に来てたんだよ。足音もたてずに……まるで猫だね」

「猫言つなシンジ。さて、トウジ質問に答える」

「あ……ああ。実はケンスケが……」

「成る程……なっ!!」

コウガはトウジの答えを最後まで聞かずに屋上に出入りするためのドアをいきおいよく開ける。するとケンスケが前のめりになって倒れてきた

「なっ……!?!ケンスケ!?!」

「見た所、シンジがパイロットだつてことを探るためにトウジを焚き付けたつてところか？」

といつつつケンスケの頭を踏みつけるコウガであった

「さーてと、そろそろ行こうぜ授業が始まる」

「でも、自習つてことは休み時間と大差ないよね」

「とりあえず、シンジとトウジは戻れ。俺はここで寝る」

「……まだ寝るのか!?!」

コウガのびっくり発言にシンジとトウジのWツッコミが炸裂。それをもともせずコウガはケンスケをナチュラルに踏みながら日だまりに寝つころがった

「すーすーすー」

あつという間に寝息が聞こえてきた

「それじゃシンジ、戻ろうや」

「そうだね」

トウジとシンジは教室に戻って行った

~~~~~

1時間後 2 - A教室

「つ…疲れた…」

「お疲れさん。シンジ」

あの後主に女子からの質問攻めに会ったシンジであった。前史ではこんなことなかったのにと思いつつも、コウガに教わった通りにあしらっていた。ちなみにコウガはこの方法を兄から教わったと言っていたが…。最終的にはヒカリが助け舟を出してことなきを得た

「情けねーなー。もう少しうまくあしらえよ」

「コウガ、見てたの？」

「いや、何となく分かる」

コウガは軽く笑いながら答えた

「にしてもケンスケはどないしたん？」

「あれなら今ぼろ雑巾になって屋上で転がってるぜ。暇つぶしで少し尋問したらまた盗撮しようとしてたからな」

哀れケンスケ、暇つぶしで運命を左右されてしまったようだ

「とりあえず、今日は授業に…ん？電話か」

コウガがポケットに入れていた携帯を取り出す

「もしもし？…兄貴！？おいこら！今学校だぞ！？え…緊急の用事？既に学校からの許可は取った！？いったに何物なんだ！？…通りすがりの仮面ライダー！？そんなもん知つとるわ！！待ち合わせ場所は！？ああ…ああ、分かった」

コウガは不機嫌そうに電話を切ると…

「馬鹿兄貴からの呼び出しだ。ちよっくら行ってくる」

そういつて教室から出て行った

「いいのかなあ…」

シンジの呟きは教室の喧騒の中に消えていった

続く…

第四話 「圧勝」

シンジの転入から三週間。コウガの姿が無かったことを除けばいたっていつも通りの毎日だった。シンジも学校に慣れており、コウガも今日戻ってきた。コウガに関しては随分と疲れていたが

「コウガ、大丈夫？」

「……zzz」

「シンジ、こいつ寝とるで」

ちなみに体育授業中である。ちなみに男子はバスケット、女子は水泳である

「次！門河、碇、鈴原チーム入れ！」

「……ん？」

「あ、起きた」

先生の呼び声でようやく起きたコウガだった

休み時間

「そういえば、今日がシャムシエルが襲来する日だったよね？」

「あー、忘れてた。俺は早退するからな」

「なんで？」

「3号機の調整が終わったから、起動実験なんだよ」

「そういえば、なんで3号機が？」

「俺のこの世界の役割がそれだからだ。それ以外に理由はない。それじゃ、後宜しく！」

そういつてコウガは窓から飛び降りた。ちなみに3階である

「ちよつと、コウガ君！？」

「委員長、大丈夫や。コウガやし」

窓の下には着地してホンダ・DN-01のアクセルを吹かすコウガの姿があった

~~~~~

NERV本部・起動実験場

壁に肩で固定された漆黒のEVA3号機。コウガはと言うとプラグスーツと呼ばれるパイロットスーツを来てエントリープラグ内で待機していた

「早く始めてくれないか？これあんまり好きじゃねえんだよ」

「少し待っていてくれるかしら？準備が終わってないのよ」

「……俺の到着時間ぐらい予測出来んだろ」

かならず不機嫌なコウガであった。実際ジツとしているのは好きではないのだからしょうがないと言えはしょうがない

「赤木博士、準備が整いました」

「分かったわ。これより3号機起動実験を始めます」

リツコの合図で起動実験の手順が次々と消化されていく

「神経接続開始」

「絶対境界線突破。EVA3号機起動しました」

「シンク口率……120%！！ハーモニクス正常値、暴走ありません」

「シンジ君の上を行ったか……。アスカが聞いたらどんな顔をするかしら」

リツコはドイツにいるもう一人のチルドレンのことを考えた

~~~~~

第1中学校 屋上

既に昼休み。なんだかんだで打ち解けたシンジ、トウジ、ケンスケは屋上で昼食を取っていた

と、そこに青いショートヘアで赤い目をした少女。ファーストチルドレン綾波レイが現れた

「綾波？」

「非常召集…。先、行くから」

感情のこもらない声でシンジに伝えた後、レイはその場を後にした

「それじゃ、行きますか」

「氣いつけてな」

「分かっているって。ああそうだトウジ、ちょっといいかな」

「どうしたんや？」

シンジはトウジに手招きをした

「ケンスケのこと、見張っててくれないか？ケンスケさ、なんかエヴァに憧れてるみたいだし、もしかしたらシエルターを出るかもしれないから」

「そんなあいつでもそんなことはせえへんやろ…」

「保険だよ保険。とにかくよろしくね」

「ああ、わかったわ」

シンジも急いでその場をあとにした

数十分後 シエルター

「チッ、まただ！」

「また文字だけなんか？」

「報道管制つてやつだよ。僕ら一般人には何も見せてくれないんだ。こんなビックイイベントだというのに」

「そう思っとるのはおはんだけや」

ビデオカメラを見ながら愚痴るケンスケに冷静にツッコミを入れるトウジだった

「なあ…外にd「いかへんわ」…何でだよ!？」

ケンスケが言い切る前に断るトウジ。何を言おうとしたのかは想像がつくだろう」

「(まったく、シンジの予想通りやな)絶対ダメや。シンジやコウガに迷惑がかかるやろ」

「なんだよちよっと見るくらいなんともないだろ？」

「……………後でコウガに折檻されるで」

「うつ…」

コウガの折檻という一言で黙ったケンスケ。コウガっていったい…

「俺、トイレに行ってくる」

「カメラは置いていけや。トイレに行くのにカメラは必要ないやろ」

「…わかったよ」

ケンスケはシエルターから出て行った

~~~~~

「目標を光学で補足。領海内に入りました」

モニターに映されたのはイカの出来損ないのような形状をした使徒・シラムシエルだ

「司令のいない間に第4使徒の襲来ね」

「まあ、敵さんはこっちの都合なんでおかまい無しでしょう」

青葉の報告を聞きつつ軽口を言い合うリツとシンジ。いつの間にか仲良くなっている

既に国連軍の攻撃が始まっていたがシラムシエルはおかまい無しで進んでいく

「まったく。税金の無駄遣いだな」

『それ以前になんで効果がないと分かりながら、こんなことするんだか。大人ってわかんねえな』

「コウガ君か。まあ面子というものだよ」

『くっだらね』

コウゾウの愚痴に答えたのは実験中に使徒の襲来に遭ったためそのまま出撃することになったコウガであった

「委員会からエヴァンゲリオンの発進要請が来ています」

『いわれなくても分かっている。3号機出撃する！』

3号機は地上に発射された

~~~~~

第3新東京市

「すごい！トウジにはああ言われたが、やっぱり見てみたいものは見たいんだ！」

ケンスケはシエルターを抜け出していた。まあ、こいつの末路は目に見えていくが

「さーてと、とつとと終わらせるか」

シヤムシエルは3号機の姿を確認すると体を起こし、光りの鞭を展開する

「武装はプログナイフにペンシルロックか…上等だ！」

3号機は繰り出される鞭の攻撃を完璧に避け切り、間合いをつめる
「はっ、はっ、おりゃあああ！！」

ストレート、フック、回し蹴り。さらに足払いのあと上段三段蹴りからのアップパーストレート。完全に3号機のペースだ

「これで！つてどわっ！？」

3号機の電力供給を行なっているアンビリカルケーブルがのび切つてしまい、動きが一瞬止まる

「しまっ！？」

その隙をシヤムシエルは見逃さず、鞭を3号機の足に巻き付け、山に投げた。この時にアンビリカルケーブルが切断されてしまい、内蔵電源に切り替わった

「どわあああああ！？」

丁度、ケンスケのいる所に

「てててててて…。あれは。……リツコさん、新型蘇生薬が出来たつて言っていましたよね？」

『ええ。そうだけど…』

「丁度いい実験隊をいまから作るんで」

『あら気が利くわね。そうね出来れば息の根を止めておいてくれなにかしら？そうすれば人体実験ができるから！』

「了解」

3号機はすぐに立ち上がるといつきに跳躍し左肩に取り付けられたウエポンラッグからプログナイフをとりだす

「はっ」

一回着地し、山を駆け下りて、間合いをつめるとシャムシエルの鞭を根元から切り裂き、コアにプログナイフを刺す

「ついでにおまけだ！」

さらに右肩のウエポンラッグからニードル針を飛ばしで追い討ちをかけた。これによりシャムシエルは完全に沈黙した

(S2機関の破壊も成功。これで4号機も完成するな)

『お疲れ様コウガ君。回収ルートを表示したからそれに沿って帰ってきて』

マヤからの通信を聞いた後3号機は帰っていった

続く…

第四話 「圧勝」(後書き)

おまけ

ケンスケはこの次の日に潰れた蛙のようになって発見されたこれを
幸いにとある科学者が実験 実験 と言っていたそうなの

もう一つおまけ

本来作戦を立てるべき作戦部長はというと

「ZZZZ」

未だに情眠を貪っていたという

第五話 「アスカ、再来」

「兄貴から聞いてはいたが…デカっ」

「二度目だけど、やっぱりでかいよね」

シヤムシエルはコアは破壊されたものの、本体は残っていたため絶好のサンプルとなった

「ええ。コア以外は殆ど原型を留めているわ。ホント理想的なサンプルよ。ありがたいわ」

「ただしS2機関は無いけどな」

直々に解析をしているリツコとコウガの会話だ。シンジはというと複雑そうな顔で視察にきたゲンドウのことを見ている

「で、解析結果は？コード601か」

「ええ。解析不能を示したコードナンバー」

「分け分からないってことですか」

シンジも会話に入ってきた。逆行前に手に入れた知識があるので前史ではチンプンカンプンだったことも楽に理解出来る

「その通りよ。でも、分かったこともあった。これを見て」

リツコは自分の端末をコウガとシンジに見せた

「使徒は粒子と波、両方の性質を持った光のようなモノで構成されているの。しかも人間と99.89%信号と座標が人間の遺伝子と酷似しているわ」

「案外、ヒトとシトは兄弟みたいなモノだったりしてな」

リツコの説明を聞きつつコウガは軽口を叩いた。その後思い出したようにこういった

「そういえば、レイの更新カード、どうしたんですか？俺とシンジはもらいましたけど」

「ああ、そういえば。忘れる所だったわ」

「あのなあ……」

珍しくあっけらかんとしたリツコの口調にコウガは苦笑混じりに呟

いた

「そんじゃシンジ、レイの所行くか」

「えええ…」

「あら、それじゃあお願いね」

コウガとシンジはリツコからレイの更新されたIDカードを受け取ってからホンダ・DN・01でその場を後にした

~~~~~

「相変わらず殺風景なとこだよね」

「髭眼鏡替して住居変えてもらっか？」

「替すにしても程々にね」

「善処する」

レイの住んでいるアパートの部屋の前でそんな会話をする二人。ゲンドウを脅すと言ったときのコウガの目はマジだったことを追記しておく

「どうせインターホンは壊れてんだ。邪魔するぞ」

「あつちよつと！コウガ！」

おかまい無しに部屋の扉を開けて室内に入るコウガと慌てて入るシンジだった

「碇君と…フォース？」

「いい加減フォースって呼ぶの止めてくれないか？何か違和感があるんだ」

「命令があればそうするわ」

「なら門河三佐からの命令だ」

「了解」

「いやいやいや！それ可笑しい！！」

ボケ合戦を始めるレイとコウガにツッコミを入れるシンジであった

「それで、何の用？」

「新しいIDカード。古い方は寄越せ。処分する」

「わかったわ」  
「じゃ、用件はこれだけだ。ああ、後少しは部屋のソウジ……じゃ  
ない掃除をしとけよ」  
文章でしか分からない間違いをするコウガであった  
「それじゃあ綾波またね」  
「ええ、碇君」  
そんな感じで二人は帰路についた

「で、なんでシンジは碇君って呼ばれてるんだ？」  
「何回かお見舞いに行ったからね」  
「あれ？訓練漬けにした筈だが？」  
「コウガがいない間にいったんだよ」  
「ちっ」

「何で舌打ち!？」  
ホンダ・DN-01に乗りながら話すコウガとシンジであった  
「ああ、そうだシンジ」  
「どしたの？」

「明後日、虹の向こう側に行くぞ」  
「虹の向こう側……オーバー・ザ・レインボウ。まさか!」  
「そのまさかだ。今回は俺、シンジ、でもって一応作戦部長のピア  
樽が行くことになってる」

「寝坊しないかな？」  
「大丈夫だ。リツコさんがEVAの装甲板を使って作った死人でも  
起きる目覚まし時計つてのを開発してくれたから」

「技術部ってそな暇あるのかな？」  
「噂だと、髭眼鏡に内緒で月の五分の一を消滅させられる位の兵器  
を作ってるって言うが」

「それ、使えるの？」  
「さあ？」

技術部……というかりツコに恐怖を抱くシンジであった

くくく

そして二日後

某作戦部長の1時間の寝坊により予定より遅れて出発したネルフ一行はミルド輸送ヘリにてオーバー・ザ・レインボウに向かっていた「にしてもこれ、鬱陶しいな」

「まあ確かにそうだけど、正式な場所なんだからさ」

コウガはダークグレーを基調とし、シンジは青を基調としたネルフ高官の制服である。前史では私服だったが、それが太平洋艦隊との関係悪化に間接的な原因となっている

「にしても死人でも起きる目覚まし時計でも1時間寝坊するってどういう神経してんだ？」

「さあ？さしずめ遅くまで飲んでたんじゃない？ペンペンが心配だよ」

「というか、今も飲んでいるがな」

とコウガが呆れた表情で視線を向けたその先には既にネルフを飛び立ってから2時間強缶ビール48本を開けている葛城ミサト作戦部長の姿があった

(後で報告しておくか。こりゃ減俸は確実だな。既に減俸40%を半年喰らってるのにな)

コウガは口には出さず、心の中で悪態をついたのだった

「さーて、見えてきたぜ」

「なんか、久しぶりって感じたなあ」

悠長なことを抜かしているコウガとシンジであった

一方オーバー・ザ・レインボウでは

「あれに乗ってる訳か…」

金髪蒼眼の美少女が甲板の上でシンジ達の乗るヘリを見上げながら

眩いた

~~~~~

オーバー・ザ・レインボウ

「あー、かつたる」

「んー、やっつついた」

へりを降りてからのコウガとシンジの開口一番がこれである

「さーて、あいつはどこにいるんだか」

コウガは甲板を歩き出した。この時コウガは制服を肩にマントのよ
うな状態でかけている

「コウガ、勝手に動き回らないでよね」

それについていくシンジも心無しか嬉しそうな表情だったりする

ちなみにミサトは酔った状態で二人についてきている。と、そこに
少女が話しかけてきた

「へろーオ、ミサト、元気してた？」

「ま、ね、あんたも、背、伸びたんじゃない？」

かなりのベロベロ口調で少女に返答するミサト

「で、噂のサードとフォースはどこ？」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！」

「きゃあっ！？」

「何やってんだよ、コウガ」

少女がサードとフォースのことを聞いた瞬間に背後から現れるコウ
ガと苦笑しながら歩いてくるシンジであった

「レディに対して失礼じゃないの!？」

「これは失礼。……………もう一人の逆行者さん」

「なっ…!？」

最後の部分はシンジに聞こえないように言うコウガ。アスカはと言
うと、驚いたような表情になっていた

「自己紹介といきますか。俺はフォーススチルドレンの門河コウガだ。

実際はシンジよりも先にネルフにいたんだが、選出日が同じだった
ようだな、五十音順でこうなったんだ。一応階級は三佐な。まっよ
ろしく頼むよ」

「えーっと、僕？サードチルドレンの碇シンジです。階級は一尉と
いうことになっています。これからよろしく惣流さん」

「セカンドチルドレンの惣流アスカラングレーよ。言っとくけど、
エースはあたしだからね」

どことなくふざけた口調のコウガ、丁寧な言い方のシンジ、そして
ライバル心むき出しのアスカ。三者三様の自己紹介であった

「さてと、それじゃ俺は提督に挨拶に行ってくるから」

「待ちなさい！それは私の…」

「お前はヘリの掃除をしてろ。空き缶を全て片付けとけ」

ミサトの台詞を遮ってコウガはそう言うのと近くにいた隊員に手伝っ
てもらいヘリの中にミサトを押し込んだ

「さーて、それじゃあ改めて俺は提督に挨拶に行くから自由にして
てくれな」

コウガはそういうと制服をちゃんと着てブリッジに向かった

「サード！ちよっとなついてきなさい！」

「はいはい」

アスカに連れられ、シンジはブリッジの裏側に向かった

~~~~~

オーバー・ザ・レインボウ ブリッジ

「いやはや、上から見たときは子供達での遠足かと思ったよ」

「ご理解いただき光栄です提督」

ここで話をしているのは、提督と呼ばれたいかにも軍人といった風  
貌の初老の男性と制服に身を包み普段とは違う丁寧な口調でしゃべ  
るコウガだ

「本日はEVA式号機及びチルドレンの護送ありがとうございます」

「ふん、おもちゃ一つの為に太平洋艦隊が総出とはいっから国連軍は宅配屋に転職したんだ？」

「某組織が結成されてからと記憶しておりますが」

コウガ：「というよりはNERVに対して嫌味をいう提督と副提督。コウガはあくまでも冷静に話を進めていた」

「有事の際に限って指揮権をNERVに移譲していただきます。ただし通常時には我々は提督の指揮権に入らせていただきます。よろしいでしょうか？よろしいのであればこの書類にサインを」

「うむ、それなら問題ないぞ」

コウガの提案に気を良くしたのか提督は書類に目を通してからサインを入れた

「ありがとうございます。それでは遅れましたが作戦部所属門河コウガ三佐以下3名の乗船許可を願います」

「分かった。それでは乗船を許可する。ようこそ国連太平洋艦隊へ」  
「それではこの後は進路を変えずに航行を続けてください。そして新横須賀港に到着次第、太平洋艦隊はドッグ入りし各種補修をさせていただきます。これはNERVからのお礼です。それでは私はこれで」

コウガは敬礼をすると、ブリッジを出て行った

「まさかここまでしてくれるとは」

「驚きですね提督」

二人は補修のところに驚いていた。これにより太平洋艦隊がNERV寄りとなったのは言うまでもない

~~~~~

一方その頃、シンジとアスカはオーバー・ザ・レインボウから離れ、EVA二号機を輸送しているオセローにいた

「ふう……。さてとアスカ、もう茶番は終わりにしよう」

「バレてたの？」

「一応、そういう情報はコウガから入ってくるし、何となく感覚で分かるんだよ」

「そう。…なら隠す必要もないか」

「やっぱり自分の知っているアスカだ」とシンジは実感した。何故だかは分からない。だがどことなくアスカの表情が割り切ったような表情だったのだ

「そつえば、加持さんは？」

「加持さん？ああ、何でも6歳の子供に手を出したとか言っただけで警察に捕まって、今はオーバー・ザ・レインボウの独房に放り込まれてるわよ」

「何か怪しいとは思っていたけど、まさかロリコンだったとはね」

「あたしも危なかったわ…」

散々な言われよしの加持ではあるが、実際これは事実である

「それでアスカ、何で君はまで逆行でき…」

シンジはその言葉を最期まで言うことが出来なかった。何故なら…

「水中衝撃波!？」

「使徒ね」

前史では第6。今回は第5使徒、ガキエルの襲来である

「じゃ、シンジ？」

「プラグスーツは自分の持ってきたから大丈夫だよ」

「それならオツケー。さあ、行くわよ!」

アスカとシンジは階段の影でプラグスーツに着替えて、二号機に登場した

「エントリープラグ挿入完了」

「OK。LCL緊急注水。A10神経接続…」

「よし、EVA二号機起動。活動限界まで残り58秒」

ここまで来た後にコウガの端末から通信が入った

「今から虹の向こう側をそっちに近づけるから、すぐに乗り移ってくれ」

「了解。そつえば指揮権は？」

これに受け答えるのはシンジ。まあ、慣れている分当たり前なのだが

「既に取りってる」

「実力行使じゃ…ないよね？」

「海の覇者にそんなことする分けないだろ」

「何言ってるか知らないけど、さっさとしなさいよ！！」

この数十秒後、二号機はオーバー・ザ・レインボウの甲板に乗り移り、電源ケーブルを接続した

「これより、第5使徒殲滅作戦を開始する！！」

コウガの号令の元、二号機の初陣が始まった

続く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9080v/>

REVERSE OF EVANGELION

2011年10月2日21時56分発行